

水と生きる

私は晴れの日が好きだ。雨は気分が下がる。でも、雨も降らなければ水不足となってしまう。恵みの雨と言ったものだ。人間は水なしでは生きていけない。農作物も水がなければ育たない。しかし、降りすぎれば人にも作物にも害が出てしまう。ほどよい雨が一番いいのだが。

水は怖い。私が小学校六年生の時に、台風で、通学路にかかる法雲寺橋という橋が崩壊した。

普段は穏やかな流れの笹子川が増水し、ものすごい勢いで橋脚を壊した。

自然の力の恐ろしさを体感した。国道二十号線にかかる橋だけあり、

その後は不便な生活を余儀なくされた。遠まわりしてのバス通学、

獣道を行き来する生活、仮橋が完成するまではそんな生活がしばらく続いた。

突然のライフラインの欠如は、

そこで暮らす人々がストレスさえも感じる生活となってしまった。

そして、三年という時を経て、今年、街の風景に馴染むように橋が完成し、

ようやく私たちの生活は今までと同様に戻った。

水の力は恐ろしい。幸いにも人的被害はなかったことが救いであった。

また、水による被害は生態系をも狂わせる。

通行止めが続き、国道を通る車が減ったため、人里にイノシシやサル、

シカが出現する事態となってしまった。

水の害は自然界を巻き込んでしまう結果となるのだと、しみじみと感じてしまった。

近年は、昔よりも集中的に雨が降ることが多くなったという。

この夏も、日本のあちこちで川が氾濫し、たくさんの被害が出ている。

これは異常気象が理由である。異常気象の原因のひとつには地球温暖化が挙げられる。

これは、人類が作ってしまった負の遺産とも言えるのではないだろうか。

便利な世の中がその便利なものを作った人間自身の首を絞め、

地球に追い討ちをかけている気がしてならない。

温暖化が地球の気温を上げ、世界のあちこちであまりの暑さのせいで森林が燃えている。

各地の豪雨で水が足りているかと思いきや、温暖化で砂漠化が起きており、

地球は一体どのようになっているのか、ひとりひとりが立ち止まって考えて見るときではないだろうか。

水は命の源だ。雨が降り、地下に浸透し、山から何千年もの月日をかけて水が沸く。

その水は天然水として私たちに届いている。

そんな自然の原理から得る恵みを私たちは大切にしていきたいために何ができるだろうか。

それは、限りある資源を大切に使うこと、利便性だけを追いかけないこと。

私たち人間のひとりひとりの小さな心がけて温暖化を防ぐことができ、海水温の上昇を緩やかにできる。

そうすれば、異常気象も起きることなく、

水害は減少するはずだ。

そして、自然の恵みである水と仲良く生きていくことが、

私たち人間の使命ではないだろうか。



駿台甲府中学校 三年

出羽桃

絵

ほんだじより